番外二　「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」吉崎・福井紀行（二）

■ 福井城址

吉崎を訪ねたあと、福井駅に着いたのは午後三時前。コインロッカーに荷物を預けて、とりあえず福井城址に向かいました。心覚えに、駅前の観光案内所でもらった観光案内図から切り取って、福井駅・福井城址周辺の略図を示します。

福井駅・福井城址周辺

まずは、越前福井藩の藩祖松平秀康、徳川初代徳川家康、福井第十六代松平康永を祭神とする佐佳枝廼社（さかえのやしろ）に詣でました。市内の再開発で複合施設になっており、駐車場などが併設されています。

佐佳枝廼社（さかえのやしろ）

東北方向に少し歩いたところにある中央公園には、岡倉天心の像がたっています。なぜ、横浜生まれの天心の像がここにあるのかというと、横浜の貿易商であった父、岡倉勘右衛門が、福井藩士であった関係です。天心自身は、福井に在住したことはないが、福井を郷里と感じ、福井出身の橋本左内を尊敬していたといわれています。

岡倉天心（文久二年〔一八六三〕～大正二年〔一九一三〕）は、

岡倉天心像（中央公園内）

明治期に活躍した文人・思想家。東京美術学校の第二代校長として、日本画家を育てました。東京美術学校から排斥されたのち、日本美術院を創設しました。その後、ボストン美術館中国・日本美術部長を勤め、日本文化を英文で欧米に広く伝えました。明治三九年〔一九〇六〕に英文で刊行した『茶の本』はつとに有名。振り返ってみて、このような日本文化の発信者は、現在のほうがより必要とされているのですが、皆無に等しいのが残念です。まあ、「クール」とか「かわいい」などの「日本文化」が世界を席捲していることで、もって瞑すべしというところでしょうか。

福井城は、徳川家康の次男、結城秀康（のちに松平姓）が、北の庄城の旧地に築城したもの。足羽神社に参詣したときに（後述）、途中の広場（福井市立郷土歴史博物館の旧地）に福井城の模型がありました。概略を見るのにちょうどよいので、ここに写真を載せておきます。現在は、内堀に囲まれた大部分が福井県庁などの敷地に転用されており、福井城址として残っているのは、西北隅の天守閣の立っている部分です。

福井城模型

福井城址へは、山里口御門の跡から入りました。堀に映っている城址の写真で、石垣の切れ目のところです。急な階段を登ったところに、「天守閣跡と福の井」の碑。その傍（かたわ）らに、福井の名称のもとになったといわれる「福の井」がありました。福井城址の周りには、桜が植わっており、春の花の時期には堀に映って、見事なことでしょう。

福井城址の西側に、福井藩第十六代松平康永を祭った福井神社

福井城址

天守閣跡と福の井

福井神社銀杏

があります。松平康永というよりも、むしろ号の春嶽のほうが通りがよい。幕末の英君として有名です。「別格官幣社福井神社」の標柱の傍らには、銀杏の大樹があります。太平洋戦争の最末期に戦災にあい枯死寸前となったが、新芽を出して復活したので、福井復興のシンボルとして福井市の指定天然記念物に指定されています。標柱の素材は笏谷石で、産地は市内の足羽山。雨に濡れたときの色が格別といいます。

■　北の庄城址

ＪＲ福井駅に戻って、コインロッカーから荷物を受けだして、桜橋近くの宿に向かう段になりましたが、日没までには間があったので、ちょっと寄り道をして、北の庄城址（柴田神社）を訪ねることにしました。

天正元年〔一五七三〕に、越前一乗谷に拠った朝倉義景、つ

柴田神社

お市の方、三姉妹像

いで近江小谷城に拠った浅井長政を滅ぼした織田信長は、朝倉旧臣と一向一揆による反攻を退け、天正三年〔一五七五〕に近江・越前を平定しました。これらの戦闘に功のあった柴田勝家に越前四十九万石を与え、加賀一向一揆勢の攻略に当たらせました。天正三年〔一五七五〕、勝家は北の庄城（福井市は戦国時代には、北の庄と呼ばれていました）を築城し、上杉謙信の参戦などに悩まされながらも、最終的に加賀一向一揆勢を平定したのが、天正八年〔一五八〇〕。天正十年〔一五八二〕に織田信長が本能寺の変で横死。このあと、お市の方と結婚。お市の方は、織田信長の妹。近江の浅井長政に嫁し、二男・三女（茶々、初、江）をもうけ、浅井長政が織田信長に滅ぼされたのち、織田家にもどっていました。天正十一年〔一五八三〕、賤ケ岳の戦で勝家が豊臣秀吉に破れ、勝家とお市は北の庄城内で自害。茶々（豊臣秀吉側室）、

北の庄城天守閣模型

初（京極高次正室）、江（徳川秀忠継室、徳川家光生母）は救出されて、それぞれの道を歩みます。

柴田神社は、柴田勝家を祀っています。天正十一年〔一五八三〕に北の庄城落城後、本丸跡地に建てた祠が起こりで、神社としての体裁を整えたのは、明治二三年〔一八九〇〕。境内には平成一〇年〔一九九八〕創建の三姉妹神社があり、市の方の娘三人を祀っています。鳥居を入ると、左手にお市の方と三姉妹像、さらには、南面して柴田勝家像。折から、ＮＨＫの大河ドラマ「江」が放映中なので、三姉妹像の写真を載せておきます。柴田神社の南半分は、北の庄城址公園となっていて、北の庄城石垣や

福井城の堀などの遺構が発掘されて、展示されています。期間限定で、北の庄城天守閣の模型も展示されていました。

■　愛宕坂と足羽神社

翌日は、コンピュータ化学会秋季年会の始まる日。受付開始が十二時半なので、時間の空いた午前中に足羽山近辺をめぐりました。おもな目当ては、橘曙覧と芭蕉の足跡をたどることです。

足羽山周辺

■　橘　曙　覧

足羽神社に詣でるには、愛宕坂を登ります。この坂の石段には、笏谷石（しゃくだにいし）が使われており、写真でわかるように、天板と側板を別々にして積み上げています。丸ごとの石を使っていないのは、多分、石材の使用量を抑えるための工夫と推測されますが、見上げると一風変わった印象をあたえます。

愛宕坂

橘曙覧黄金舎跡の碑

愛宕坂の途中に、橘曙覧黄金舎跡（たちばなあけみこがねのや）の碑が立っています。そこは、橘曙覧記念文学館（二〇〇〇年開設）の門前です。橘曙覧（文化九年〔一八一二〕～慶応四年〔一八六八〕）は、歌人、国学者。「たのしみは」で始まる『独楽吟（どくらくぎん）』の連作（五二首）で有名。その中からいくつか引用しておきましょう。

たのしみは朝おきいでて昨日まで
　無りし花の咲ける見る時
たのしみはそゞろ読ゆく書の中に
　我とひとしき人をみし時
たのしみは世に解がたくする書の
　心をひとりさとり得し時
たのしみは心をおかぬ友どちと
　笑ひかたりて腹をよるとき

『志濃夫廼舎歌集』、橘曙覧

『日本古典文学大系九三近世和歌集』岩波書店（一九六六）

橘曙覧記念文学館には、『独楽吟』の連作が、二列に並んだ表示柱（縦長の行灯）として展示されています。引用した歌は、いずれも平明なので、講釈するまでもなく、歌の心はよくわかります。平明にもかかわらず、橘曙覧の到達した境地は奥深い。橘曙覧が、黄金舎に住んだのは二十八歳から三十七歳までの約十年です。その後、市内三つ橋に移り、藁屋と称しています。

愛宕坂をさらに登ると、前述の福井城模型が残してある旧福井市立郷土歴史博物館の広場があります。ここには、橘曙覧の歌碑が立っています。

歌碑に刻んであるのは、国学者としての橘曙覧の日常を吐露した歌です。橘曙覧は、本居宣長に私淑し、飛騨高山の国学者田中大秀に師事しています。

正月ついたちの日古事記を開きて
　はるにあけて先みる書も天地の

橘曙覧の歌碑

はじめの時と読いずるかな　　曙覧

一市井人として一生を送った橘曙覧ですが、生前にも名声は藩内に聞こえていて、安政の大獄で謹慎中に藩主松平春嶽は、橘曙覧に、万葉集から三十六首の秀歌を選ばせています。曙覧五十四歳のとき、藁屋に春嶽が出向き、出仕を勧めましたが辞退し、市井人を貫きました。

橘曙覧の業績の顕彰は、長男井手今滋の『橘曙覧小伝』や『橘曙覧遺稿志濃夫廼舎歌集』の刊行によるところが大きく、のちに正岡子規が曙覧を万葉集の系譜を引く歌人として重視する契機となりました。正岡子規『橘曙覧の歌』（初出は『日本』）が青空文庫から手に入ります。

http://www.aozora.gr.jp/cards/000305/

files/46490¥_30026.html

この論評の中で、正岡子規は、曙覧が万葉の精神をよく継承しているとしながらも、「ただ歌全体の調子において曙覧はついに万葉に及ばず、実朝に劣りたり、惜しむべき彼は完全なる歌人たるにあたわざりき」と評しています（正岡子規『日本』明治三二年四月二二日付）。これは、多少、正岡子規の独りよがりで、それに続く、曙覧の歌の講評も頷けないところが多々あります。『万葉調』をめざしたとしても曙覧の独自の境地があるはずで、多くの歌人を『万葉調』として一括りにして優劣を付けようとするのは、そもそも無理なことです。

■　足羽神社

愛宕坂は、足羽神社への参道です。祭神は、継体天皇。『日本書紀』の継体紀（の中の一説）によれば、応神天皇五世の皇孫で、直系が途絶えたとき、越前から迎えられて、第二六代天皇として即位。時に、五十八歳。

写真は、足羽神社の拝殿。本殿はこの奥の林の中。足羽神社境内には、しだれ桜、高尾モミジの大木があり、継体天皇御世系碑が立っています。この碑は、橘曙覧などが弘化三年〔一八四六〕に建立したもの。

継体天皇は謎の多い天皇です。『古事記』の武烈天皇の項の最後には、次のような記事があります。

天皇既崩、無下可レ知二日続一之王上。故品太天皇五世之孫、袁本杼命自二近淡海国一令二上坐一而、合レ於二手白髪命一、授二奉天下一也。

足羽神社拝殿

継体天皇御世系碑

（書き下し文）

天皇既に崩りまして、日続知らすべき王無りき。故に、品太天皇の五世の孫、袁本杼命を近淡海国より上り坐さしめて、手白髪命に合せて、天下を授け奉りき。

『古事記・上代歌謡』荻原浅男、鴻巣隼雄 校注訳
日本古典学全集一、小学館（一九七三）

この訓読文による書き下し文は、本居宣長の『古事記伝』風ですので、いわゆる漢文調に訓読したものを次に示します。振りがなも付けておきます。

天皇既崩、無下可レ知二日続一之王上。故、品太天皇五

世之孫、袁本杼命、自二近淡海国一令二上坐一而、合レ於二手白髪命一、授二奉天下一也。

（書き下し文）

天皇既に崩じ、日続知らすべき王無し。故に、品太天皇の五世の孫、袁本杼命を近淡海国より上り坐さしめ、手白髪命に合せて、天下を授け奉る。

「品太天皇」は、応神天皇。「袁本杼命」は、継体天皇。手白髪命は、武烈天皇の皇妹。

（現代語訳）

武烈天皇が崩御されたが、後継の皇子がいなかった。そこで、応神天皇の五代目の子孫である袁本杼命（継体天皇）を近江の国から上らせて即位させ、武烈天皇の妹君の手白髪命と娶わせて、政治を任せることにした。

『日本書紀』の継体紀や『扶桑略記』によると、継体天皇の崩御は、八十二歳（他の説も併記されています）。『古事記』では、崩御した年齢は四十三歳とあり、大幅に異なっています。出身地について『古事記』の記載を文字通り受け取ると、継体天皇（袁本杼命）は、近江出身ということになります。ただし、『日本書紀』や『扶桑略記』によると、出自は近江ではなく、越前の三国で、大伴金村に迎えられて近江で即位し、その後山城の国で二度、都を移して、即位後二十年して大和に入ったとされています。継体天皇については、いろいろな説が飛び交っており、どうも確信のもてるところまでゆき着きません。

百坂（百段坂）

説明板

参道を戻り、旧郷土歴史博物館の広場を過ぎてさらに下ったところに、百坂という急峻な横道があります。説明板によれば、文政一一年〔一八二八〕に、愛宕坂と同時に改修されたとあり、この坂の石段にも、笏谷石が使われています。

■　藤島神社

百坂を下り、水道記念館を右手に見て大通りに出ます。大通りを南へ三分ほど歩くと、藤島神社前に着きます。鳥居をくぐると、参道は急な階段です。

この神社は新田義貞とその一族を祀っています。なぜ、新田義貞を祭神とする神社がここにあるのか、ちょっとだけ歴史の復習。

藤島神社参道

藤島神社社殿

新田義貞の鎌倉攻め、足利尊氏の六波羅探題攻略により鎌倉幕府が滅亡。後醍醐天皇を中心とする建武の新政（建武元年〔一三三四〕）がおこなわれたが、はやくも建武二年〔一三三五〕足利尊氏の離反により頓挫。新田義貞は、建武二年〔一三三五〕に湊川の戦いで、後醍醐天皇側の楠木正成とともに、足利尊氏と戦うが敗北。勝利を得て入京した足利尊氏は、光明天皇を擁立して、ここに北朝が成立。後醍醐天皇は、吉野に逃れて南朝を成立させました。ここから南北朝の抗争が始まります。後醍醐天皇の命により、新田義貞は恒良親王と尊良親王を奉じて越前へ下向し、越前金ケ崎城（現在の敦賀市）によるが、建武四年（延元二年〔一三三七〕）に敗北。その後、一時勢いを取り戻すものの、建武五年（延元二年〔一三三八〕）に、平泉寺衆徒がこもる越前藤島城を攻略中の味方を応援にゆく途中、燈明寺畷（現在の福井市新田塚町付近）で敵方と遭遇し、乱戦の末戦死。

燈明寺の前に布陣して、藤島城の攻略に手間取るところから、新田義貞戦死にいたるまでを『太平記』から引用しましょう。折りよく、日本文学電子図書館（J-TEXTS）にディジタル版が置いてあります。

○義貞自害事　S2009

（前略）官軍、櫓を覆て入んとすれば、（藤島城の平泉寺）衆徒走木を出て突落す。衆徒橋を渡て打て出れば、寄手に官軍、鋒を調て斬て落す。追つ返つ入れ替る戦ひに、時刻押移て日已に西山に沈まんとす。大将義貞は、燈明寺の前にひかへて、手負の実検してをはしけるが、藤島の戦、強して、官軍やゝもすれば追立らるゝ体に見へける間、安からぬ事に思はれけるにや、馬に乗替へ鎧を著かへて、纔に五十余騎の勢を相従へ、路をかへ畔を伝ひ、藤島の城へぞ向はれける。其時分黒丸の城より、細川出羽守・鹿草彦太郎両大将にて、藤島の城を攻ける寄手共を追払はんとて、三百余騎の勢にて横畷を廻けるに、義貞覿面に行合ひ給ふ。細川が方には、歩立にて楯をついたる射手共多かりければ、深田に走り下り、前に持楯を衝双て鏃を支て散々に射る。義貞の方には、射手の一人もなく、楯の一帖をも持せざれば、前なる兵義貞の矢面に立塞て、只的に成てぞ射られける。

（中略、義貞戦死。首級は敵方の手に落ちる。）

義貞の死骸の前に跪て、腹かき切て重り臥す。此外四十余騎の兵、皆堀溝の中に射落されて、敵の独をも取得ず。犬死してこそ臥たりけれ。

『太平記』巻第二十、『太平記　全』（流布版本）（国民文庫刊行会）
日本文学電子図書館 http://www.j-texts.com/

（現代語訳）○義貞自害のこと　S2009

（前略）新田義貞方の官軍が、平泉寺の衆徒が守っている藤島城の櫓を倒して突入しようとすると、衆徒は長い棒を出して、突き落とす。逆に衆徒が橋を渡って打って出ると、寄せてきた衆徒に、官軍は刀の切っ先を揃えて、切って落とす。追いつ追われつ、攻防が入れ替わる戦いが続き、時刻がおしせまって、日はすでに西の山に沈もうとしている。大将の義貞は、燈明寺の前に布陣して、負傷した敵兵を検閲していらっしゃったが、藤島城の戦いが手強く、官軍がややもすると追い立てられるさまを見ていると、これは捨ててはおけないと思われたのでしょうか、鎧に着がえ、馬に乗り換えて、わずか五十騎ほどの手勢を従えて、正規の道でなく畦道を伝って、藤島城へ向かわれた。そのころ、敵方は、黒丸城より、細川出羽守・鹿草彦太郎を両大将にして、藤島城を攻めている官軍を追い払おうと、横道の畦道を迂回して進んでいたが、突然に義貞の軍に遭遇した。細川方は、楯をもった射手がたくさん徒歩で従っていたので、泥深い田に走り下りて、楯を隙間なく前に並べて、鏃を弓につがえて、どんどん矢を射散らした。一方の義貞方は、射手を一人も従えていず、楯を一枚も持っていなかったので、兵士が義貞の前に立ちふさがったが、ただ敵の矢の的になって、射殺されるだけというありさまであった。

（中略、義貞戦死。首級は敵方の手に落ちる。）

重臣たちは、首のない義貞の死骸の前に跪て、切腹して果てた。残りの四十騎あまりも、射落とされて田の側溝の中に落ち、敵方を一人も倒すことができず、犬死して倒れていた。

「犬死してこそ臥たりけれ」の言葉でわかるように、『太平記』の作者は、たった五十騎で救援に出向いた義貞の軽率さを非難しています。たしかに、総大将の義貞は、自ら援軍に出向くのではなく、有能な部下を大将にした援軍を仕立てて出陣させるべきですね。ただ、それまでに負けが込んでいて、総大将としておさまりかえることが、義貞にはできなかったのでしょう。

時は下って明暦二年〔一六五六〕に、戦死したとされる場所で、新田義貞のものとおぼしき兜が発見され、越前松平家で保管されていました。この兜が、明治九年〔一八七五〕に藤島神社が創建されたときに宝物として献納されました。藤島神社の旧地（現在の福井市新田塚町）は低湿であったため、明治三四年〔一九〇〇〕現在の地に移りました。

■　西光寺と左内公園

■　西光寺の勝家墓地

藤島神社から五分ほど北へ戻ると、柴田勝家の墓所である西光寺に着きます。西面する門には、「光明山乗律院西光寺」の石標。この門は、保育園との共用でここからは境内へは入れません。境内へ入るには、裏側の東側の門に回ります。この寺は、朝倉家第三代貞景によって岡の庄（現在の福井市岡保）に創建されたが、朝倉家滅亡時に焼失。天正三年〔一五七五〕に柴田勝家が入府したときに帰依し、現在地に移して、北の庄西光寺と呼び菩提寺としました。

西光寺（柴田勝家墓所）

柴田勝家・お市墓

東側から境内に入ると、南向きに柴田勝家とお市の方の墓が立っています。この墓は、豊臣家の祐筆山中山城守長俊によって建立されたと伝えられています。通路を挟んで南側の建物（西門から写した写真でみると、自動車と鐘楼のうしろの建物）は、柴田勝家の資料館です。

柴田勝家とお市の方の辞世

夏の夜の夢路はかなき跡の名を　　勝家
雲井にあげよ山ほととぎす
さらぬだにうちぬるほども夏の夜の　　お市
別れをさそふほととぎすかな

■　橋本左内

柴田勝家墓所の西光寺のすぐ北に左内公園。ここは、橋本左内の墓所です。公園の南側に、橋本左内の像。西側に、東面して橋本左内の墓があります。

橋本左内像

橋本左内墓

啓発録碑

橋本左内（号景岳。天保五年〔一八三四〕～安政六年〔一八五九〕）は、大坂の緒方洪庵、江戸の杉田成卿に師事して、蘭方医学を学んだのち、福井藩主松平春嶽に側近として仕えました。十四代将軍として一橋慶喜擁立を図る春嶽をたすけて、京都で朝廷対策に奔走しました。結局は、紀伊徳川家の慶福（のちの家茂）を推した井伊直弼一派に破れ、春嶽は隠居、左内は小塚原刑場で斬首されました。世にいう「安政の大獄」です。これは報復にほかならず、井伊直弼の歴史的評価を貶めることになった所業です。左内をはじめとする、有為の人材を多数抹殺したため、直弼の意図に反して、結果的に幕府の命脈を縮めることになりました。もし彼らが生きていれば、日本の歴史は倒幕という方向に向かわなかったかもしれません。

二十六歳で夭折したため著作は少ないが、十五歳の折に著した『啓発録』（嘉永元年〔一八四八〕）は、早熟な天才であることを示しています。その中の五つ項目（稚心を去る、気を振う、志を立てる、学に勉める、交友を択ぶ）は、前途のある若者の心得として、今なお通用します。左内公園には、これらの五項目を刻んだ碑が墓所に隣接して立っています。

■　芭蕉と福井

『おくのほそ道』によると、芭蕉は、吉崎の歌枕「汐越の松」を見たあと、丸岡の天竜寺を訪ねています。すでに山中温泉で腹を病んだ曾良と別れており、金沢で入門した立花北枝（蕉門十哲の一人）がここまでは同行しています。北枝とも別れ、永平寺をめぐったあと、福井に着いて、訪ねたのは、洞栽宅。芭蕉宿泊地洞栽宅跡の碑が、左内公園の中、左内墓の南側に立っています。『おくのほそ道』の該当の箇所を引用しておきましょう。

福井は三里計なれば、夕飯したゝめて出るに、たそかれの路たどくし。爰に等栽と云古き隠士有。いづれの年にか、江戸に来りて予を尋。遙十とせ余り也。いかに老さらぼひて有にや、将死けるにやと人に尋侍れば、いまだ存命して、そこくと教ゆ。市中ひそかに引入て、あやしの小家に夕貌・へちまのはえかゝりて、鶏頭・はゝ木ゞに戸ぼそをかくす。さては、此うちにこそと門を扣ば、侘しげなる女の出て、「いづくよりわた

芭蕉宿泊地洞栽宅跡の碑

説明パネル拡大図

り給ふ道心の御坊にや。あるじは此あたり何がしと云もの〻方に行ぬ。もし用あらば尋給へ」といふ。かれが妻なるべしとしらる。むかし物がたりにこそ、かゝる風情は侍れと、やがて尋あひて、その家に二夜とまりて、名月はつるがのみなとにとたび立。等栽も共に送らんと、裾おかしうからげて、路の枝折とうかれ立。

『おくのほそ道』芭蕉、元禄一五年〔一七〇二〕

『芭蕉奥おくのほそ道』萩原恭男校注、岩波文庫、岩波書店（一九九一）

「むかし物がたりにこそ」というのは、紫式部『源氏物語』のことです。「あやしの小家に夕貌・へちまのはえかゝりて」の箇所が、第四帖「夕顔」をふまえています。ただし、『源氏物語』では、「げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりのこのもかのも、あやしくうちよろぼいて、むねむねしからぬ軒のつまなどにはいまつわれたるを」と夕顔が垣根や屋根にからまっている様子を描写したあと、遣戸口から出てくるのは、「侘しげなる女」ではなくて、「黄なる生絹の単袴、長くきこなしたる童女」です。このあたりの脚色は芭蕉ならではの俳諧味で、等栽（洞栽）宅から出てきたのが、本当に「侘しげなる女」であったかどうかは保障のかぎりではありません。

（現代語訳）

福井は（永平寺から）三里ばかりなので、夕餉を食べてから出かけたところ、夕暮れの道を歩くのは、はかがゆかない。福井に等栽（洞栽）という俳人が隠棲している。何年か前に、江戸に来て、私を訪ねてきたことがあるが、もうはや十年余りになる。どのように老いぼれているか、あるいは死んでしまったのかと、人に尋ねると、まだ存命で、どこそこに住んでいると教えてくれた。市中の人目にたたないような奥まったところに、あやしげな小家があって、夕顔やへちまが覆いかかって、鶏頭や箒木が門の扉を隠している。さては等栽宅はこの中であろうと、門をたたくと、みすぼらしい女が出てきて、「どこからいらっしゃった修行中のお坊さまですか。主人は、このあたりのだれそれという者のお宅にいってい

ます。もしも用があるなら、そこを訪ねてください」という。それが、等栽の妻であるらしいことがわかった。昔の物語にこのような風情ある場面がでてきたことがあると思いながら、教えられた家を訪ねると、やっと等栽に出会うことができた。等栽の家には、二晩泊まって、名月は敦賀の湊でみようといって旅立った。等栽も「一緒に送りましょう」と、おもしろく裾をからげて、道案内をしようとはりきって旅立った。

よほどうまが合ったのでしょう、二晩も泊って、敦賀まで同行するとは。「敦賀で名月を」とはりきったのは、芭蕉も等栽（洞栽）も同じ。すでに、曾良と別れて芭蕉の一人旅になっているので、洞栽が道案内を買って出たのでしょう。

曾良は別れたというものの、療養先の伊勢長島に向かう途中、前もって宿泊地ごとに手はずを整えていた形跡がうかがえます。ただし、『曾良日記』によると、新田塚を訪ね、黒丸城のあとをしのんだあと、福井には宿泊せずに、今庄まで歩いて、そこで宿泊しています。日記には、等栽（洞栽）の名前はでてきませんので、福井での手配はおこなわなかった可能性が大です。

宮崎荊口が書き留めた『荊口句帖』が、昭和三四年（一九五九）に大垣市で発見され、その序文（露通による。露通は『おくのほそ道』の大団円の大垣で出てきます）の中に、芭蕉が敦賀で詠んだとされる十五句のうちの十四句（一句は破損のため見えない）が記されています。これが、『芭蕉翁名月一夜十五句』と呼ばれる連作です。左内公園の洞栽宅跡の石標の背後には、これらの句が説明入でパネル標示されています。その中の一句。

福井洞栽子をさそふ

名月の見所問（とは）ん旅寐せむ　芭蕉

『芭蕉翁名月一夜十五句』元禄二年（一六八九）

松尾芭蕉句碑「名月の見所問（とは）ん旅寐せむ」

此の句を刻んだ芭蕉句碑が、洞栽宅跡の石標のかたわらに立っています。文字に墨入れをしていないので、かなり判読しにくいが、目を凝らすと、満月の中に五七五と三行に彫られているのがわかります。

ここまで来たところで、時間切れ。日本コンピュータ化学会秋季年会の受付開始時間がせまったので、昼食を済ませたあとで、会場の福井商工会議所へ向かいました。この日は、研究発表と夜

の懇親会に出席。演題は、「置換様式の制限を考慮した化合物の数え上げ」。これが筆者の普段の本業で、まじめに勤めています。

■　養浩館の青鷺

翌日は、学会に出て午前中と午後の前半の発表を聞き、すこし早く切り上げて、雨の中を養浩館庭園の見物に出かけました。福井城址の北、約三〇〇メートルのところにあり、冒頭に掲げた地図からは、すこしだけはずれています。

養浩館庭園
（御座の間より清廉を望む）

（御台所）

この庭園のある屋敷は、福井藩の藩邸であった御泉水屋敷を、明治一七年〔一八八四〕に松平春嶽が養浩館と名づけ、迎賓館として使っていたものです。昭和二十年〔一九四五〕の福井空襲により焼失していたのを、平成五年〔一九九三〕に復元したもの。中央の広々とした池の周りをめぐる回遊式の庭園が見どころ。御座の間より西を望むと、対岸に清廉（寄棟の小亭）が設（しつら）えられています。

雨の中に行灯を点（とも）した養浩館の建物を池越しに一枚。池の水面に行灯の光が映ってなかなかの景色でしたが、写真では今一つですね。

養浩館を池越しに望む

築山の青鷺

それに、築山を青鷺が悠然と歩いていたので、一枚。青鷺が首筋を伸ばし悠々と歩む足元には雨に濡れた落葉。養浩館を歩む松平春嶽を彷彿とさせます。写真に添えて駄句を一句。濡れ落葉たる七十前の翁が、毅然とした鷺を羨（うらや）んでいる図は、滑稽。

養浩館にて、築山の青鷺をめでて

青鷺の脛長くして落葉踏む　艸蟲齋

青鷺は何をおもふか秋の雨　艸蟲齋

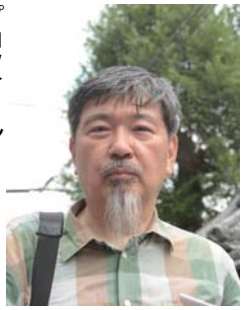
口直しに蕪村の句を載せておきましょう。ただし、こちらは夏の句。

夕風や水青鷺の脛をうつ　蕪村

『蕪村自筆句帳（本間本）』三八五、尾形仂編著、筑摩書房（一九七四）

夏山や京尽し飛鷺ひとつ　蕪村

『蕪村全句集』一〇二九、藤田真一、清登典子編、おうふう（二〇〇〇）



プロフィール

藤田眞作〔ふじたしんさく〕。一九四四年〔昭和十九年〕北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所（http://xymtex.com）を主宰。

© 2007, 2008, 2010, 2011 藤田眞作 http://xymtex.com